

会期：令和6年6月11日(火)～9月1日(日)

会場：黎明館3階 企画展示室

江戸時代後期の薩摩藩は、「天文学的」ともいわれるほどの多額の負債を抱えました。この財政危機に対応したのが、調所広郷でした。調所広郷の財政改革が成功した背景には、藩債返済の繰り延べや殖産興業の他、商人の協力もありました。この展覧会では、江戸時代の藩財政の状況や、商人の活動などについて紹介します。



割渡金銀書付

黎明館
NEWS

屋外展示「樋の間二つ家」を計測！

屋外展示の「樋の間二つ家」は、2つの屋根をもち、居間や客間の「おもて」と炊事・食事をする「なかえ」が繋がった造りです。旧横川町(霧島市)にあったものを移築したもので、築200年ほどと推測されています。ここで、ヘリテージマネージャー養成研修会による実測調査が行われました。受講者の方たちは、古い民家の造りをじっくりと観察し、実測を進めていました。南九州独特の建築様式を伝える貴重な建物を、皆様もぜひご覧になってください。

※ヘリテージマネージャー：建築士協会が設定する講習会を修了し、地域に眠る歴史文化遺産を発見、保存、活用して、地域づくりに活かす能力をもつと認定された建築士



展示室貸会場イベントスケジュール(2月～4月)

期間	イベント	会場	観覧料	主催者お問い合わせ先(敬称略)
2/6(火)～2/11(日)	赤塚展2024	第1	無料	赤塚学園 099(813)0033
2/14(水)～2/18(日)	第62回鹿光展・第5回アンデパンダン展	第1	無料	東光会鹿児島支部・鹿光会 090(9573)3425
2/14(水)～2/18(日)	鹿児島大学教育学部美術専修卒業制作展	第3	無料	鹿児島大学教育学部美術科 099(285)7901
2/20(火)～2/25(日)	鹿児島純心女子短期大学デザイン表現コース卒業制作展2024	第3	無料	鹿児島純心女子短期大学 099(253)2677
3/2(土)～3/10(日)	第107回 二科展 鹿児島巡回展	第1・2	無料	二科会鹿児島支部 0993(53)2998
3/7(木)～3/10(日)	鹿児島大学学友会書道部展・桜美(OB)展	第3	無料	鹿児島大学学友会書道部 080(2691)4593
3/20(水)～3/24(日)	第42回鹿児島水彩展	第1	無料	鹿児島県水彩協会 099(225)7211
4/11(木)～4/14(日)	第29回豊祭書展	第1	無料	書道研究会豊祭 099(243)3145
4/16(火)～4/21(日)	キャノンフォトクラブ鹿児島 第24回写真展	第3	無料	キャノンフォトクラブ 090(5085)8507
4/20(土)～5/6(月)	トリックアート in KAGOSHIMA	第2	有料	KTS鹿児島テレビ事業販促部 099(285)8966
4/27(土)～5/5(日)	第13回鹿児島白日会展	第1	有料	白日会南九州支部 池川直 090(1873)4553
4/30(火)～5/4(土)	鹿児島モデラーズコンベンション2024	第3	無料	鹿児島モデラーズコンベンション2024実行委員会 090(1167)5434

編集
後記

開館40周年記念のインタビュー企画では、5名の方々にこれまでの黎明館のこと、そしてこれからの黎明館についてお話しいただきました。開館に至るまでの話や開館当時の話はとても興味深く、多くの人の尽力なくして今の黎明館はないのだと改めて感じました。この40年の間に黎明館に集まった貴重な資料とともに、これまでに黎明館と関わった人々の功績や想いも、この先へと伝えていかなければならないなと思いました。(中村)

編集・デザイン 田平晶子 中村友美

Information

※ 展示や催し物等の予定は変更になる場合がありますので、ホームページまたはSNS (Facebook・X・Instagram)にてご確認ください。



開館時間 9:00～18:00(入館は17:30まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日)、毎月25日(土・日・祝日の場合は開館)、12月31日～1月2日、そのほか館が定める日

観覧料 一般410円 高・大学生250円 小・中学生150円
(年間パスポート)
一般820円 高・大学生500円 小・中学生300円

※障害者手帳の提示で無料 ※団体(20名以上)割引あり。 ※鹿児島県内に居住する70歳以上無料(令和5年度まで) ※鹿児島県内に居住する18歳以下は、土日祝日は無料(令和5年度まで) ※観覧料・減免制度は、令和6年2月1日現在のものです。

アクセス 鹿児島空港から鹿児島市内行きバス「市役所前」下車、徒歩7分
JR「鹿児島駅」から徒歩15分
JR「鹿児島中央駅」から市電・バス利用
市電・バス「市役所前」または「水族館口」下車、徒歩7分
鹿児島市内巡回観光バス「薩摩義士碑前」下車すぐ
無料駐車場あり(普通車125台 バス20台)

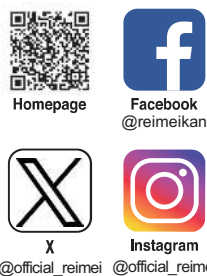
① 徒歩 ② 自転車 ③ バイク ④ 自家用車 ⑤ 駐車場 ⑥ 西門をご利用ください。
● 新館門および ● 北門は、多行者のみ通行可能です。(車椅子での通行は危険です。)
● 車椅子で来場される方には、駐車場まで車でお送りいただくことをお願しております。
※ 御来場時：黎明館開館日の6:30～18:00(休館日は通り抜けできません)

鹿児島県歴史・美術センター 黎明館

〒892-0853 鹿児島市城山町7番2号
☎099-222-5100 FAX.099-222-5143

Follow us!

ホームページ、SNSで黎明館情報を発信しています。フォローして、ぜひチェックしてみてください。



REI MEI

vol.41

No.4

Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan

鹿児島県歴史・美術センター黎明館だより「黎明」



Contents

特集
企画展
伝統と革新の融合 鹿児島城

調査資料室だより
令和5年度刊行の県史料紹介

展覧会を振り返って

黎明館のフカボリ①
展覧会のこれ、なんで?

黎明館40年の歴史INTERVIEW 第4回
そのとき、黎明館は

特集 企画展

伝統と革新の融合 鹿児島城





企画展

伝統と革新の融合

鹿児島城

令和6年

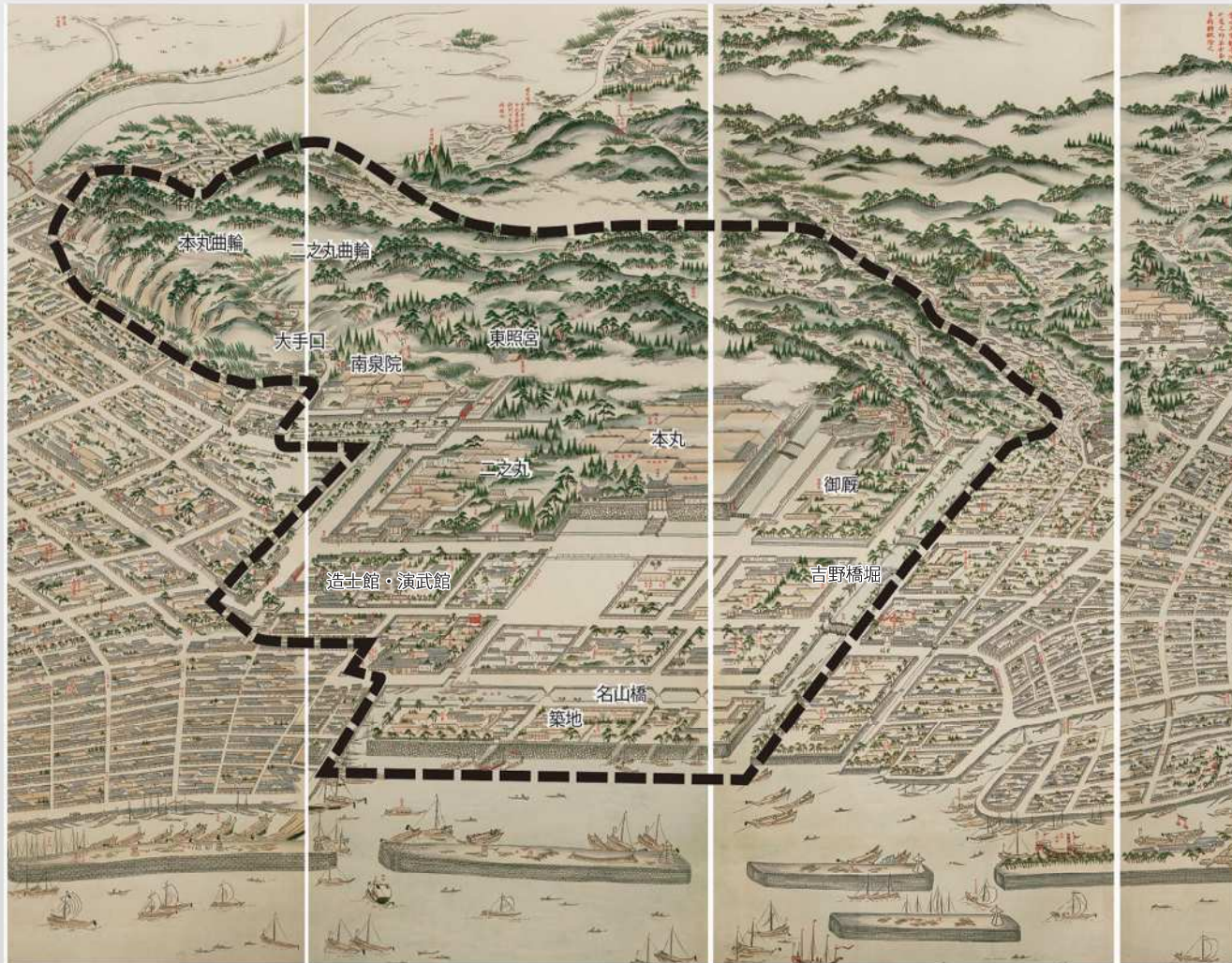
3月12日(火)→6月2日(日)

黎明館3階 企画展示室

鹿児島城跡は、令和5年3月に国史跡に指定されました。

指定の際には「山城と麓の屋敷を組み合わせた構造や、文化面の重視といった伝統的な要素と、海を通して海外の新しいものや文化を取り入れる革新的な要素が融合した城」であることが評価されました。

企画展では、最新の調査結果から鹿児島城の歴史的価値を明らかにします。



は、鹿児島城跡の範囲

鹿児島城下絵図屏風(玉里島津家資料)(部分)

第一章 鹿児島城とはどのような城か



黎明館1階 鹿児島城のジオラマ

鹿児島城には天守がありません。天守を造ることは、領民に対して力を示すという面があります。しかし、島津家は長い間鹿児島を治めていたため、その必要がなく、天守を持つ城が流行する以前の山城と平地の屋形という伝統的な城造りを行ったようです。

第三章 海を越えた交流

江戸時代、限られた海外との交流の窓口である琉球と関係が深かった薩摩藩は、海を通じて様々な地域の輸出品が入ってきていました。薩摩藩では、それらを取り入れて薩摩独自のものを生み出していました。



ドイツラインラウト地方の塩釉炆器

出典：鹿児島県立埋蔵文化財センター2022
『鹿児島(鶴丸)城跡・北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告第214集

ふるさと歴史講座

「地形・地質からみた鹿児島城跡の秘密」

日時：3月16日(土) 13:30~15:00
講師：鹿児島大学名誉教授 大木 公彦 氏
会場：黎明館3階 講座室
※ 事前申込制 応募期間：1月26日(金)~2月25日(日)

企画展解説講座

「伝統と革新の融合 鹿児島城」

日時：4月13日(土) 13:30~15:00
講師：黎明館学芸課主査 西野 元勝
会場：黎明館3階 講座室
※ 事前申込制 応募期間：3月13日(水)~3月27日(水)

※ 事前申込の詳細は、黎明館ホームページをご覧ください。

第二章 鹿児島城の文化力

発掘調査では、能舞台の橋掛り(本舞台と控室をつなぐ部分)の跡や、庭園遺構の一部などが見つかり、島津家が武力面だけでなく、文化面にも力を入れていたことが証明されました。



能舞台橋掛り跡

第四章 日本の近代化と鹿児島城

幕末、鹿児島城内では日本初の電信の実験など、近代化のための様々な実験が行われました。現在の県立図書館はその実験場で、干し飯をつくるためのレンガ窯や島津斉彬の時代の水練場と考えられている堀も見つかっています。



黎明館と県立図書館との間にある堀の調査

鹿児島城跡歴史ウォーク

日時：5月18日(土) 10:00~12:00
講師：黎明館学芸課主査 西野 元勝
集合：黎明館1階 ロビー
※ 事前申込制 詳細は後日ホームページに掲載します。

展示解説

日時：3月23日(土) 13:30~14:10
4月21日(日) 13:30~14:10
5月25日(土) 13:30~14:10
会場：黎明館3階 企画展示室
※ 事前申込不要、要入館料

令和5年度刊行の県史料紹介

黎明館調査史料室では、今年度末に刊行する『鹿児島県史料』の校正作業に取り組んでいます。これまで刊行してきた『鹿児島県史料』は、今回紹介する2冊を加えて108冊を数えます。また、ホームページには令和元(2019)年度刊行分までの『鹿児島県史料』100冊分のPDFも公開しています。あわせて御活用ください。

以下では、今年度刊行予定の『鹿児島県史料』(2冊)を御紹介します。

『日記雑録拾遺 神社調三』

「神社調」は、薩摩藩の領域であった薩摩・大隅・日向諸県郡の寺社の由緒・関係文書・歴代住職名などを郡郷ごとに編纂したものです。本年度刊行の『神社調三』には、以下の地域に関する内容を収めました。

- (1)「薩摩国之物部 六」
大口 羽月 山野 長島 甕島
- (2)「薩摩国之物部 七」
谷山 喜入 今和泉
- (3)「薩摩国之物部 八」
今和泉 指宿 山川 穎娃 知覧 鹿籠
- (4)「薩摩国之物部 九」
鹿籠 久志 秋目 坊 泊
- (5)「薩摩国之物部 十」
加世田
- (6)「薩摩国之物部 十一」
加世田 川辺 山田 硫黄島 伊作
※ いずれも東京大学史料編纂所蔵

はじめに「薩摩国之物部 六」には、大口の永福寺や西原八幡宮、羽月の白木観音の文書類が掲載され、山野に関しては、伊地知季直(季通)の調書(嘉永2(1849)年)が収録されています。

続いて「薩摩国之物部 七」では、谷山の伊佐智佐六所大権現や皇徳寺・慈眼寺に関する記載が見られます。中でも皇徳寺の寄進状などから、明治初期の廃仏毀釈で廃寺になる前は、当寺が相当な規模の寺院であったことが推察できます。

次に「薩摩国之物部 八」では、山川の正竜寺や穎娃の開聞大明神(枚聞神社)について、その由来を詳しく紹介していることが特色として挙げられます。

そして「薩摩国之物部 九」は、坊の一乗院に関する文書類が多く見られ、後奈良天皇の綸旨なども含まれていることから、勅願所としての由緒が分かります。さらに収録された様々な書状からは、当院が篤く崇敬されていた様子が窺えます。

また「薩摩国之物部 十」では、日新(島津忠良)ゆかりの寺院である日新寺や常潤院に関する記載や文書類から、日新と加世田との深い関係性が読み取れます。

最後に「薩摩国之物部 十一」については、川辺の飯倉三所大明神や宝福寺、伊作の大汝八幡宮や船木大明神の棟札や寄進状から、これらの寺社が地域で大切に扱われていた状況が想像できます。

『市来四郎史料四』

昨年度に引き続き、東京大学史料編纂所蔵の「旧邦秘録」文久三年八～十(巻一七～巻二四)と元治元年一～三(巻一～巻九)を『市来四郎史料四』として刊行します。

「旧邦秘録」は市来四郎が編集し、島津久光が加筆した編纂物で、文久二(1862)年が7巻3冊、同三年が24巻10冊、元治元(1864)年が32巻10冊、合計63巻23冊から成ります。他に「中稿旧邦秘録」が63巻23冊、「旧邦秘録材料」が188冊あります(すべて東京大学史料編纂所蔵)。

本書には、文久3年7月の薩英戦争に参戦した武士達の記録、8月の「八月十八日の政変」、9月の久光上洛、10月の生野の変、元治元年正月には長州藩による薩摩藩蒸気船の砲撃、久光が朝議参与となり参内するなど重要な出来事に関連する史料が満載です。

以下、目次の一部によりながら本書の概要を御紹介します。括弧内の算用数字は文書番号を表します。

- 「文久三年 八」(巻一七～巻一九)
 広島藩ヨリ攘夷戦捷慶賀ノ使者来覽及貿易取組(18)・攘夷御祈願ノ為メ大和行幸ノ布令(24)・長藩及ヒ三条実美以下ノ人々落去後朝議一変(46)
 「文久三年 九」(巻二〇～巻二一)
 英夷再襲ニ付準備(50)・御城下一組軍賦(51)・御府内八ヶ所台場御手当賦(52)
 「文久三年 十」(巻二二～巻二四)
 国父公御上洛アラセラルヘキ旨発布(61の1)・主上当時ノ形勢ヲ憂慮シ玉ヒ密ニ国父公ニ宸翰ヲ賜フ(82)・長州田之浦ニ於テ我カ汽船ヲ放撃セラル(108)
 「元治元年 一」(巻一～巻三)
 国父公ハ朝議参預從四位下左近衛権少将推任叙宣下ヲ蒙ラル(117)・將軍家山陵修繕ノ功ニ依リ從一位ニ叙セラル(141)・薩藩ハ旧臘馬関ニ於テ汽船焼燼セラレタル事由責問ノ為メ使節ヲ長州ニ遣サントス(169)
 「元治元年 二」(巻四～巻六)
 国父公ニ条城ヘ御登城アルヘキ旨閣老ヨリ捧書ヲ以テ達セラレタリ(172)・夷賊征服之儀ニ付国父公御親書ヲ以テ邸中又ハ国中ヘ示諭セラレタリ(179の1)・重野厚之丞長防事情探訪報告書(188)
 「元治元年 三」(巻七～巻九)
 調練場ニ於テ長州征討出軍ノ隊兵操練ヲ催サル(190)・国父公御叙任ノ御礼且ツ御帰国ニ付御暇乞ノ為メ尹宮外三殿ヘ参殿セラレタリ(194)・当時京撰ノ間ニ浮浪ノ徒蟻集シ訛言浮説或ハ投書等ノ類(228)

企画展ロス

学芸専門員 崎山 健文

企画展を担当するといつも、最終日を挟む1週間程の間、仕事が手に付かないほどではないものの、ふとした瞬間に寂しさや喪失感に襲われます。言わば「企画展ロス」です。どうしてそうなるのか、今年度8月に閉幕した私の企画展「幕末・明治初公開資料展」を例に考えてみましたので、しばらくお付き合い下さい。

本展はその名が示すとおり全ての資料が初御披露目で、書状などの古文書を中心に据えたものでした。古文書を展示する時に学芸員が恐れるのが「古文書スルー」です。キャプションや現代語訳などをじっくり読んで頂ければ面白さが伝わるのに、一瞬で難解だと切り捨てられスルーされてしまうのです。苦勞して解読したのに…。こうなると、わかりやすさ重視で作成した現代語訳も文字の塊と受け取られ、裏目に出ています。

何とか足を止めていただきたいと、最近ではキャプションの端に1行のキャッチコピーを付けることにしています。「なぜこんなことに…」とか「叶わなかった蝦夷地開拓への想いに胸が熱くなります」とか、学芸員の視点とか独自の切り口が伝わるよう、軽いタッチで、時には主観も織り込みながら作成します。

資料1点ごとに長い時間と手間をかけて生まれた企画展は、大袈裟に言えば自分の子供のようなものです。ところが残酷なもので、会期が終了すれば跡形もなく撤収され、昨日まで資料やパネルで埋まっていた部屋が空っぽになってしまいます。それはロスにもなります。

「じゃあ規模の大きい特別展はもっと大きい喪失感なのでしょうね」と考える人もいるでしょうが、意外にそうでもないというのが私の見解です。特別展は詳細な図録に記録され完全に消えるわけではないというのが理由のひとつ(当館では年間4本の企画展を1冊のミニ図録として刊行していますが、1つの企画展に割り当てられるのは6頁)。

さらに特別展の担当者は、展示最終日以降も撤収の段取りに、資料返却にと、1か月程何かと忙しく、呑気に喪失感に浸っている暇はありません。これに対し私の企画展は僅か1日で撤収を終え、返却もなかった。というわけで、どっぷり企画展ロスにつかった次第です。

企画特別展を振り返って

学芸専門員 吉村 晃一

企画特別展「南北朝の動乱と南九州の武士たち」は約6000人の方々に観覧いただき、無事閉幕することができました。テーマ設定や資料の選定などについては、次頁からの「黎明館のフカボリ」でも触れていますので、重複を避けながら、本展を振り返ってみたいと思います。

実は、令和3年に、本展と同名の企画展を開催し、館所蔵・保管の資料約60点を、他館所蔵資料の写真パネルと併せて展示しました。幸いにも、観覧した方々からは好評をいただき、展示解説・講座にも多数申込みいただきました。しかし、あいにくのコロナ禍で、特に県外の方々から、「見に行くことができないが、図録の販売はないのか」とのお尋ねがいくつかありました。

そこで、企画展の「内容を充実」させ、他館所蔵資料も借用・展示して、多くの皆様に「本物を見ていただきたい」と思い、本展の準備を進めていきました。結果、古文書や彫像、肖像画、屏風、絵巻物、考古資料と、幅広い分野の貴重な資料を借用・展示することができ、「本物を見ていただきたい」という目標は果たせたかと思えます。一方、「内容の充実」については、いくつかの課題が残りました。そのうち2つを挙げたいと思います。

一つ目は、大隅・日向地域の動向に関して、幕府方の畠山直頭に焦点を当てられなかった点です。二つ目の課題にも繋がりますが、直頭と南朝方の楡井頼仲や伊東祐広との抗争も紹介できたらよかったです。また、直頭は、九州下向後の足利直冬のもと、一大勢力を形成し、島津氏とも対立しました。このような複雑さが南北朝時代の面白さなのですが、展示に反映できませんでした。

二つ目は、「南朝の忠臣たち」に関する展示をもっと充実させたかったという点です。明治初期以降、南朝方の武士たちを「忠臣」として顕彰する動きがあり、彼らへの贈位、神社の創建、伝記の作成、記念碑の造立が行なわれました。南九州における顕彰の様子を紹介しつつ、それがどのような意味を持っていたのかを掘り下げた展示ができればよかったです。

一方、観覧者から、場内の解説パネルに高評価をいただきました。複雑な対立状況の推移を図解した「時代解説」、湊川合戦図屏風や後醍醐天皇像模本などの「絵図の見方・みどころ」、多様な様式と機能を持つ古文書にまつわる「古文書ガイド」などのパネル類です。これらは、担当編集員が多くの参考文献、他館の展示を参考に、観覧者目線に立って、内容を理解しやすいようにと作成したもので、お褒めいただいたのは嬉しいことでした。

振り返ると、あれもこれもと、後悔の念ばかりが募りますが、それらは、今後の課題にしたいと思えます。

教えて学芸員!

展示会のこれ、なんで?

黎明館開館40周年記念企画特別展「南北朝の動乱と南九州の武士たち」編



展示会を観覧しているとき、「これは何だろう?」「どうしてこうなっているの?」と疑問を抱くことはありませんか?ここでは、展示会のアンケートや展示場での質問等をもとに、展示会のなかでみなさんが抱いた「ギモン」にお答えします。

1 南北朝時代の展示会開催を心待ちにしていました! 展示会のテーマはどのようにして決まったのですか?

きっかけは「岡元文書」との出会い!

「岡元文書」は入来院氏一族の岡元家に伝来した文書群で、黎明館が所蔵しています。足利尊氏の花押が据えられた感状や、後醍醐天皇諭旨など、教科書にも登場する人物に関わる文書が多数遺されており、これらを多くの人に見てもらいたいと思ったのが始まりです。また、過去の黎明館の企画特別展のテーマを振り返ってみると、戦国時代以前の政治史をテーマにしたものが開催されていなかったこともあり、南北朝時代をテーマに展示会を開催することにしました。

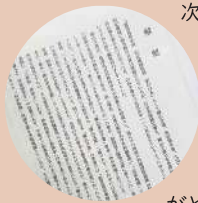


展示会では岡元文書14点を展示しました

2 古文書が多くて少し難しかったです。展示する資料はどのように選んでいるのですか?

南北朝時代の魅力をどう伝えるか

今回の展示会の展示シナリオを作成するにあたっては、まず南北朝時代に関する概説書や研究論文を読み、時代の流れを掴むことから始めました。その際、そこで述べられていることがどの資料を根拠しているのかを確認し、どの資料を展示すると南北朝時代の魅力が伝わるか、検討を加えていきました。



次に、それらの資料をどこが所蔵しているのかを調べます。この時、何度も手に取ったのが『鹿児島県史料』で、その解題には所蔵館(機関・個人)に関する情報と、その文書の伝来過程が詳しく述べられており、資料の性格を把握するのにとても勉強になりました。また、他館の展示会を観覧したり、過去の展示会図録を読んだりして、どのような資料がどこに所蔵されているのかの把握に努めました。

こうして、所蔵者を特定できたら、実際にそれらの資料を閲覧するために調査に赴きます。この調査に際しては、資料の状態、分量(サイズ)などを確認すると同時に、借用し展示する際に気を付けることなどを担当者から伺います。場合によっては、展示期間に関する条件が合わなかったり、運搬中に毀損の恐れがあるといった理由から、借用を断念することもあります。

今回、資料調査のために訪問した館(機関)は、本州の6都府県の6館、九州の5県8館、県内の4館の計18館でした。閲覧の手続きから実際の閲覧、そして借用から返却まで、多くの方々のご協力によって貴重な資料を借用・展示することができました。



金ヶ崎城跡(福岡県筑波市)

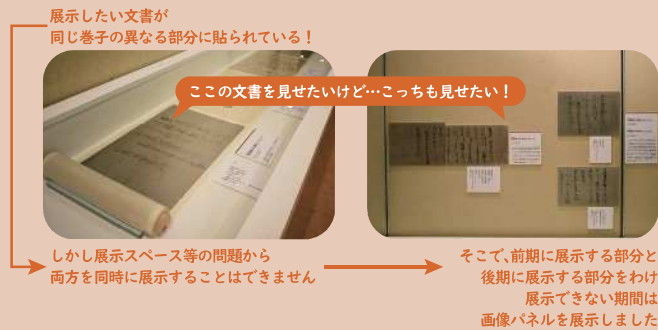
3 見たい資料の展示期間が短いです! どうして会期の途中で展示替えをするの?

展示と保存のジレンマ!

国宝・重要文化財については、「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項」によって、公開(展示)のための移動回数は年間2回以内、期間は年間延べ60日以内と定められています。そのため、過去の展示状況(あるいは今後の展示予定)によって、展示期間を限定せざるを得ない場合があります。また、資料(特に絵画資料)の保護のため、所蔵館が展示期間に制限を設けている場合があります。そういった情報については、資料調査の際に担当者に確認します。さらに、古文書は巻子に貼り込まれて伝来している場合が多く、同一巻子の中で異なる資料を展示したいといったケースがあり、会期を前期・後期に分けて展示替えを行ないました。



閉館後や休館日に展示替えを行いました



展示したい文書が同じ巻子の異なる部分に貼られている!

この文書を見せたいけど...こっちも見せたい!

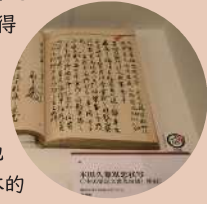
しかし展示スペース等の問題から両方を同時に展示することはできません

そこで、前期に展示する部分と後期に展示する部分をわけ、展示できない期間は画像パネルを展示しました

4 撮影可能な資料があつてうれしかったです。撮影できる資料とできない資料があるのはなぜ?

黎明館所蔵・保管の資料は撮影OK

デジタルカメラ、さらにはスマートフォンの普及によって手軽に写真をとることができるようになった頃から、展示資料の撮影を希望する来館者の声が増えてきました。また、他館で撮影を許可する事例も多くなってきたことから、黎明館でも常設展示における資料の撮影について検討した結果、館有資料については撮影を許可することとし、寄託資料についても寄託者から撮影許可を得るなどの準備を整えてきました。以上のような経緯を踏まえて、今回の展示会においても館有資料と寄託者から許可が得られた黎明館保管資料については撮影をOKとしました。一方、他館(機関・個人)から借用した資料については、基本的に撮影はお断りさせていただきました。



展示場内の撮影について			
OK 撮影可能	資料	キャプション 解説パネル	SNSへの掲載
	○	○	○
マーク ついていない場合	×	×	×

※ 撮影可能な資料・キャプション・解説/パネルでも、**動画撮影はできません。**

直感的に理解できるように○と×のマークで表示しました

アンケートの意見を受けて、展示場内に撮影についてのパネルを設置しました

黎明館40年の歴史 INTERVIEW そのとき、黎明館は

昨年度のたより黎明では、黎明館40年の歴史を年表にまとめて振り返りましたが、今年度はこれまでに黎明館と関わった方々にインタビューを行い、そのとき黎明館では何が起きていたのか、実際にその場にいた方の声をお届けします。

第4回 黎明館のこれから



学芸課長 切原 勇人

平成23(2011)年から黎明館勤務。美術・工芸担当。「日本藝術院展」、「かごしまの仏たち」、「武者姿とさつまの刀」等の展示会を担当。

令和5(2023)年に開館40周年を迎えた黎明館ですが、この10年間を振り返って、特に印象に残っていることは何ですか?

まずはコロナ禍の約3年間でしょう。当館も臨時休館を余儀なくされました。人々が集まる施設であるにも関わらず、出入口を制限し、密な状況は避けなくてはなりませんでしたが、当館にとっても初めての経験だったので、周りの環境が変わる中、我々が何をしなくてはならないのか、深く考えさせられました。制限が多くなる分、細やかな広報が求められ、SNSなどを活用して発信することがずいぶん増えました。SNSの投稿に反応をもらったり、SNSをきっかけに当館を知った人がいたり、人とのつながりや情報の拡がりを意識するきっかけにもなりました。

令和元(2019)年には、常設展示の一部リニューアルが完了しました。常設展示のリニューアルは、平成8(1996)年に一度行われていますが、今

回はどのように変わったのでしょうか。

今回のリニューアルは、明治維新150周年を機に、最新の研究成果や新しい展示技術を導入し、より分かりやすく鹿児島県の歴史と文化を学べる場を創出するという目的で行われました。展示場の中で大きく変わったのは、2階部門別展示室(歴史)です。明治維新や日本の近代化に関するコーナーの充実を図り、新たに映像やジオラマ、引き出し型の解説パネルを導入しました。より楽しみながら、歴史を学べるコーナーになっていると思います。

もう一つ大きく変わったのは、案内表示や展示解説が多言語化されたことです。常設展示には多言語対応の音声ガイドシステムも導入され、海外からのお客様も常設展示を観覧しやすくなりました。

インバウンドを考慮し、案内表示や展示解説には英語のほかに中国語(繁体・簡体)と韓国語も併記されました。

海外客船の来港の増加に伴い、コロナ禍前から海外からのお客様の来館が増えていましたが、今年度に入ってからはさらに急増しています。館内の多言語化を行ったことで、海外の方が利用しやすくなったのは良かったです。常設展示の内容も含めて、まだまだ鹿児島の歴史や文化の魅力を伝えきれていないと思うので、いかにして多言語で発信していくか、そこは今後の課題の一つといえるでしょう。

令和2(2020)年の御楼門完成も、黎明館にとっては大きな出来事だったのではないのでしょうか。

御楼門は2020年の3月に完成しました。御楼門が建ったことで、当館の敷地を含む鹿児島城本丸跡全体の景観が、これまでとは大きく変わったと思います。高さ、幅約20mの国内最大級の城門は、鹿児島市内観光の拠点であることは間違いありません。御楼門の完成で、当館に求められる役割もまた変わったと考えています。



黎明館のコレクションについては、何か変化がありましたか?

玉里島津家資料一式が寄贈されたことが、特に大きな出来事だと思います。ご寄贈いただいた24000点にもおよび資料は、常設展示場内の玉里島津家コーナーで展示されているほか、企画展や企画特別展に出展されることもあります。資料はすべて館内でデータベース化されていますが、今後、さらに一つ一つの資料の詳細な調査が進み、鹿児島の歴史の解明に貢献することが期待されます。また、ここ10年は遺品を整理する過程で見つかった古文書や刀、美術品等が持ち込まれるケースが多くなってきています。鹿児島にまつわるものなのでぜひ鹿児島に遺してほしいと、県外からお問い合わせいただくこともあります。

昭和39(1964)年に鹿児島県博物館協議会として発足した鹿児島県博物館協会は、今年で発足から60年を迎えます。黎明館は平成元(1989)年から会長および事務局として、各館と連携をとり、情報交換や協力体制を築いてきました。

発足当初は6団体だった加盟館も、今では70館を超えています。各館が置かれている状況は様々だと思いますが、今、博物館には何が求められ、どこに向かおうとしているのか、博物館協会全体として改めて考えなくてはならないと強く感じます。

40年という節目を迎えた今、黎明館はどんな課題を抱えているのでしょうか。そしてこの先、50年、60年と見据える中で、黎明館に求められるものは何なのでしょう。

まず、今の時代に合う環境整備を進めていくことが求められると思います。一つは、展示・鑑賞環境の整備。例えば、展示場照明のLED化が挙げられます。LEDは資料にとっても、鑑賞の環境としても有効なので、今後進めていく必要性が高い部分です。もう一つは、建物のバリアフリー化。こちらに関しては来館者からの要望も多く、必要性に迫られていると感じます。来館者は様々な目的で当館を訪れますが、来館者の動線に建物の動線が合っているとは言い難いのが現状です。誰もが使いやすい館を目指していく必要があります。博物館には、貴重な財産を守り、それらの価値を見いだしていくという使命があります。当館もまた、鹿児島県にとって重要な資料を守り、伝えていくという役割を担っています。高齢化や世代交代に伴い、個人の元に保管されてきた資料が、ともすれば失われてしまいかねない状況が予想される中、当館は鹿児島県の先頭に立って資料を守っていかねばなりません。今後も収蔵資料が増加していくことを考えると、十分な容量と設備が備わった新たな収蔵庫が必要です。時代の進展に即しながら、環境を整えていくことが求められていると考えます。

次に、博物館と学校が連携して行う教育、いわゆる「博学連携」の取り組みへの強化が求められています。これまでにも、教職員向けの講座等を開講してきましたが、当館所蔵の資料を教材づくりに活かしてもらうなど、より実践的に学べる仕組みを提供していきたいと考えています。昨今では、オンライン授業が可能になり、博学連携の可能性は広がったといえるでしょう。しかし、インターネットをどのように活用するのかについては、博物館として丁寧な議論と対応が必要だと考えています。デジタルの可能性は、今後も大きく広がり、進展していくと思います。博物館として、そのスピードにどのようについていくか、慎重に検討していきたいと思っています。